

こども自然公園の研修会

【寄稿：理事・執行委員 長谷川芳男】

8月13日（火）9:00～12:30、東京大学大学院農学生命科学研究科山田利博教授をお迎えして、こども自然公園で研修会を実施。11名の会員と玉川大学女子学生3名が加わり、大変有意義な会を持つことが出来た。今回の山田先生のご視察点は次の通り。①桜山再整備事業（バーベキュー場一帯を含む）2019年3月で実施したところの「若返り剪定と腐葉土マルチングとの関連性」。②治療から1年目、2年目、3年目の細根の生育状況。③根こぶ線虫病根の状況など。

現場での調査は桜山整備事業の250個体の中の1個体を選定し、治療実験樹No.5、No.6、No.10、No.12の5個体の枝葉の生育状況、細根の生育状況、根こぶ線虫病根の状況等を、参加者全員が先生を囲んで注意深く進めた。

●桜山整備事業の1個体（治療から半年経過）の被覆材の防草シートを捲り、腐葉土層を掻き分けると元気な細根が次々と現れてきた。腐葉土層の下の表土を掘削すると、根こぶ線虫病のこぶが連なった根が出てきた。根こぶ線虫病罹病根は生きていたが、新しい細根は全く見られなかった。若返り剪定治療後は腐葉土層の中で育った健全な細根が新しい枝葉を支えていると考える。

●No.5、No.6は2017年2月、EM施用（No.5）と無施用（No.6）の比較検討の為の治療実験樹であった。両樹共に細根の生育は良好で、しっかりと土壤中にも健全な細根を伸ばしていた。細根の下を掘り下げると、根こぶ線虫病根が現れて来た。No.5ではゴルフボールほどの大きなこぶも出てきた。やはり根こぶ線虫病罹病根には新しい細根は全く見られなかった。若返り剪定治療から約3年が経過し、現在の枝葉は、落葉堆肥の中で育った細根が支えているものと考えられる。尚、樹勢回復と生き物の関係を調査している玉川大学の学生からの指摘で、8月になってから褐色せん孔病の影響で早期落葉が見られるようになり、No.5は葉が少なくなったとのこと。

●No.10は2017年11月に山田先生をお迎えした際に治療の様子をご覧戴いた治療実験樹だ。枝葉の生育はすこぶる良好。根元の落葉堆肥を掻き分けると元気な細根が広がっていた。細根が地下に向かって伸びているのも見られた。細根が広く張り詰めた下を掘削すると、根こぶ線虫病根が出てきた。治療実験樹の全てが根こぶ線虫病と共存しており、落葉堆肥や腐葉土のマルチングが有効な処置方法であるのを見て頂くことが出来た。落葉堆肥・萱のマルチング材とEM活性液の灌注を続けてきた効果で元気な細根が広く張り詰めて、すこぶる良好な枝葉を育てている様子も見て頂くことが出来た。

●No.12では治療材や労力をどこまで省略可能かを調べる治療実験だ。被覆材シートを捲り掘削すると笹の地下茎が土壤中に密生しており、新しい細根が育つことが出来る状況にはなかった。樹勢回復には若返り剪定と落葉堆肥や腐葉土マルチングで細根が伸びることが出来る条件が必要であることも見て頂けた。

●午前11時には現場での調査を終えて、全員レストルームに戻り、先生との質問や感想等、意見交換の場を持った。その席上で先生からご示唆頂いたことは、バーベキュー場では長年根元が踏みつけられて大変固くなっている。現在は腐葉土の中で元気な細根が育っているが、やがて固い表土に突き当たり伸びることが出来なくなる。細根が腐葉土の中で元気にうちに表土を軟らかくしておくことが大切ということだった。先生の言われる通りであると会員の皆様も賛同。早速、9月の共同実験の際に、表土を軟らかくする実験を行うことにした。この実験は新しい管理手法の出発点となるものであると考えている。

バーベキュー場の桜は治療期間中でも良好な状況にあるからと安心して、問題が起きてからでは手遅れになる。良い時にも点検調査して、改善点を見つけ、問題点を先取りしていく大切さを教えられた。



中央が山田利博教授



参加者全員が山田教授を囲んで調査